

令和元年度病害虫発生予察情報 発生予報第6号

令和元年8月30日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	①前年の平均被害粒率は平年より低かった（－）。 ②天候予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている（＋）。	開花後 20～40 日に薬剤を 1～2 回散布する。その際、薬剤はサヤに十分付着させる。 チオファネートメチル剤は耐性菌が出現しているため使用を避ける。 収穫後は高湿度の場所に放置しない。
	吸実性カメムシ類	全域	—	やや多い	8月中旬の巡回調査では、吸実性カメムシ類の発生ほ場割合はやや高かった（＋）。	莢伸長期～子実肥大期に薬剤防除を実施する。

○注意が必要な病害虫

大豆	<p>■べと病</p> <p>県内各地で発生が確認されています。発病には品種間差があり、「里のほほえみ」は本病に対しやや弱いですが、また、降雨で発生が助長され、葉裏に白色～淡黄褐色の菌叢を生じるのが特徴です。さらに葉から子実へ進展して被害が大きくなることもあります。薬剤防除は発病初期から7～10日おきを実施します。</p>
----	---

注) 予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は中通り北部でやや低く（－）、 中通り南部でやや高かった（＋） 。会津では平年並であった（±）。	
	褐斑病	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は中通りで平年並であったが（±）、 会津で平年よりやや高かった（＋） 。	中晩生種で発生が多い場合には、防除を徹底する。
	炭疽病	中通り北部 中通り南部 会津	— — —	平年並 やや多い 平年並	果実での発生ほ場割合は中通り北部、会津ともに平年並であったが（±）、 中通り南部では平年よりやや高かった（＋） 。	発生が懸念される園地では、9月上旬にキャプタン剤を十分量散布する。 発病果実は二次伝染源になるので、見つけ次第適切に処理する。

	キンモンホソガ	全 域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	地方の防除暦に従い薬剤散布を行う。
モモ	せん孔細菌病	中通り北部	—	多い	①新梢葉での発生ほ場割合は福島地域、伊達地域ともに平年並であったが(±)、伊達地域では発生程度の高いほ場が多く見られた(+) ②天候予報によると、降水量は平年並または多いと予想されている(+)	秋期防除を徹底して、病原細菌の越冬菌密度低下を図る。 (注意報第2号参照)
	モモハモグリガ	中通り北部	—	やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は、福島地域で平年より高く(+)、伊達地域では平年並であった(±)。	発生の多いほ場では、収穫後にも防除を行い、越冬密度低下を図る。
ナシ	黒星病	中通り 浜通り	— —	多い 平年並	①中通りでの新梢葉、果実の発生ほ場割合は、平年より高かった(+) ②浜通りでの新梢葉、果実の発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-) ③天候予報によると、降水量は平年並または多いと予想されている(+)	発生の多いほ場では、「幸水」収穫後に秋期防除を徹底する。 (注意報第3号参照)
果樹共通 (中通り ：リンゴ、 モモ、ナシ 会津：リンゴ 浜通り： ナシ)	シンクイムシ類	全 域	—	平年並	リンゴ、モモ、ナシともに果実での発生は、平年並に確認されなかった(±)。	発生が多い場合には、防除を徹底する。
	カメムシ類	全 域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	飛来が確認された場合は速やかに防除を実施する。
	ハマキムシ類	全 域	—	平年並	リンゴ、モモ、ナシともに、果実での発生は平年並に確認されなかった(±)。	
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	寄生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	今後の発生に注意し、要防除水準(1葉あたり雌成虫1頭以上)に達したら、早急に殺ダニ剤を散布する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、 (-) は少発要因、 (±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病虫害

リンゴ モモ ナシ その他の 果樹	<p>■吸蛾類</p> <p>果実が熟し始めると、吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあるので、吸蛾類の生息地である山林原野に近い園地では注意が必要です。多目的防災網等の物理的防除や、糖蜜トラップ(砂糖200g、酒200cc、酢200cc、水1400ccを混ぜ合わせたもの)を誘引源とした食餌誘殺が有効です。</p>
-------------------------------	---

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、 (-) は少発要因、 (±) は平年並要因であることを示す。

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年よりやや低かったが（－）が、発生程度の高いほ場が確認された（＋）。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（＋）。	①多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 ②葉かび病抵抗性（cf-9）品種でも発病するレースが確認されているので注意する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ②施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意すること。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（－）。	蔓延すると防除が困難なので、発生初期から防除を実施する。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 ②初期病徴は褐斑病と類似しているので注意する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（+-）。	①低密度時から防除を徹底する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。

キク（露地栽培）	白さび病	全 域	－	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（＋）。	①多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 ②品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①低密度時から防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去4年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	－	やや多い	発生ほ場割合は、例年よりやや高かった（＋）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	－	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	－	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。 フェロモントラップの誘殺数は一部地域において8月中旬以降に急増している（＋）。	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注）予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病虫害

夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■トマトかいよう病</p> <p>苗、ほ場での発生を確認しています。本病は細菌病であり、種子や土壌中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。</p> <p>■トマトすすかび病</p> <p>巡回調査ですすかび病の発生が確認されています。すすかび病は葉かび病と病徴が類似しており、肉眼での判別は困難です。これらの病害は、多湿条件下で発生が助長されるので、換気を十分に行うとともに少発生時から防除を行ってください。また、薬剤防除を行う場合には、いずれの病害であるかを確認して薬剤を選択してください。苗での発生を確認しています。</p>
リンドウ	<p>■黒斑病</p> <p>一部ほ場で発生を確認しています。本病は病斑上に形成された分生子から、雨滴とともに分散し蔓延します。多湿条件下で発生が助長され、本県では例年8月下旬頃から多発する傾向であることから、適宜防除を実施してください。</p>

野菜・花 き共通	<p>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</p> <p>キュウリのアブラムシ類、各作物のアザミウマ類の発生が多くなっています。それにともない、これらが媒介するキュウリモザイクウイルス（CMV）や、トマト黄化えそウイルス（TSWV）等の各種ウイルス病の発生が懸念されます。ウイルスの感染を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV 及び ZYMV 等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p> <p>■トマトハモグリバエ</p> <p>本種は、ウリ科、ナス科など多くの作物に寄生します。これまでの調査からキュウリやトマトでは、夏期以降に急激に増殖し、被害が拡大することがあるので発生動向に注意してください。</p>
-------------	---

より詳しい発生状況や防除対策は、福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせは TEL024-958-1709、FAX024-958-1727 または e-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jp へお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで2019年度農薬危害防止運動を実施しています◆
農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。